九鬼守隆（くきもりたか）（天正元（1573）年～寛永９（1631）年）

九鬼守隆は、天正元年に嘉隆の次男として鳥羽で生まれた。仮名は「孫次郎」で、初の名は「友隆」で次に「光隆」と替え、最後に「守隆」となった。天正 17（1588）年の秀吉の小田原攻めに出陣したとされる。その後、兄、成隆とともに父嘉隆を支え、豊臣政権下における手伝い普請や材木輸送などを差配していた。慶長２（1597）年に家督を継ぎ、鳥羽城主となる。慶長４（1599）年に従五位下に叙せられ「長門守友隆」と名乗るようになる。

慶長５（1600）年、徳川家康の上杉攻めに従っていたが、父嘉隆が、西軍について鳥羽城を乗っ取ったことを知り、池田輝政の指揮下に入るが、三河国岡崎で志摩へ帰国して伊勢路を防衛するよう命じられた。鳥羽城を奪取した嘉隆に、再三の説得をするものの、これを聞き入れなかったため親子で戦うことになった。その後、志摩の安乗に上陸して国府城に本拠を構え、ここを拠点に嘉隆と対峙し、鳥羽城救援に向かっていた伊勢国桑名城主、氏家行廣の兵船を撃沈させ、９月 11 日には加茂の船津において嘉隆・氏善軍と戦っている。東軍の勝利後、守隆は家康に父の助命を懸命に請い、聞き入れられたものの、嘉隆は自害してしまう。戦後、伊勢国で２万石を増加され、嘉隆の 5,000 石と合わせて、55,000 石を領することとなった

九鬼家は幕藩制下でも九鬼水軍の機能を保ち続け、外様小藩ながら職能集団として特殊な地位にあり、守隆は幕府の船奉行を勤めた。慶長 14 年に、幕府は西国大名の５百石以上の船を没収するが、その際には受け取り役を守隆が勤めた。

大坂冬の陣では「三国丸」と呼ばれた大船を筆頭に 60 余艘の船団で、大坂湾を出入りする船の見張りにあたり、徳川方の水軍とともに豊臣方と戦った。続く夏の陣では堺に火を放った豊臣方を海上から攻撃し、大坂城が落城すると、大坂湾河口付近の葭島（よしじま）に潜む豊臣残党狩りを命じられ、落人数百人を生け捕ったという。そしてこれが九鬼水軍、最後の戦いとなった。この恩賞により領地は５万６千石に加増され、守隆の時代に九鬼氏は最盛期を迎えたといってよい。

しかし、跡を継ぐ予定であった次男貞隆の病死をきっかけに、三男隆季と五男久隆との間で後継争いが起こる。守隆は久隆を跡継ぎに指名するが、隆季や家臣団が反対したため、家中を巻き込んだ大騒動に発展し、その最中の寛永９（1631）年に病死する。その後も家督争いは収まらず、幕府の仲介をうけることになり、幕府の裁定で家督は久隆に決定するが、久隆は摂津三田、隆季は丹波綾部にそれぞれ転封されることになった。両地域とも、山間の海のない土地であり、これにより九鬼氏は水軍としての役目を終えることとなった。